

平成30年度スポーツ庁委託事業
「Special プロジェクト 2020 体制整備事業」

徳島県「Special プロジェクト 2020」 体制整備事業 成果報告書



平成31年3月
徳島県教育委員会

本報告書は、スポーツ庁の Special プロジェクト 2020 体制整備事業として、徳島県が実施した平成 30 年度徳島県「Special プロジェクト 2020」体制整備事業の成果を取りまとめたものです。

従って、本報告書の複製、転載、引用等にはスポーツ庁の承認手続きが必要です。

はじめに

2020 年東京パラリンピック競技大会を成功に導くためには、選手の強化のみならず、多くの障がい者がスポーツを楽しめる環境を整備することにより、障がい者スポーツの裾野を広げていくことが重要であるといわれています。

また、オリンピック・パラリンピックは、スポーツの祭典であるとともに文化の祭典でもあり、各地で文化プログラムが開催されるなど、気運の醸成が図られており、障がいのある人の芸術・文化活動が一層推進されているところです。

こうした中、昨年度より取り組んでいる Special プロジェクト 2020 体制整備事業を今年度も継続して実施いたしました。

具体的には、スポーツ分野において、重度障がい者も楽しめる「ボッチャ」を県下の特別支援学校全てで実施し、ボッチャを通じた交流・共同学習の推進を図るとともに、独自のスポーツ文化を育んできた徳島視覚支援学校や徳島聴覚支援学校では、大学生のボランティア等を活用した更なるスポーツ振興を図るなど、広く地域との交流を深めるための活動を展開いたしました。

また、芸術・文化活動においては、全ての特別支援学校が参加し、デジタル技術をいかしたアート作品を柱とした特別支援学校アート展の開催や、新たに日本の伝統美である生け花を始めとする地域での作品展示など、地域に向けた発信方策を検討してまいりました。

さらに、世界遺産登録を目指している「四国八十八箇所霊場と遍路道」の県内霊場札所における、特別支援学校の生徒によるお接待活動の中で、小物作品の配布や、アート作品の展示を通して、広く県内外の方々への理解啓発に取り組みました。

事業の実施にあたり、県内の全ての特別支援学校の協力を得て活動に取り組むとともに、徳島県障がい者スポーツ協会、芸術専門家、経済関係者、教育関係有識者、県障がい福祉課等の参画により実行委員会を組織し、活動内容の検討を行いました。

本報告書は、上記内容を実践した成果を検証するために、作成したものです。多くの方々にご覧いただき、忌憚のない御意見、御助言を賜れば幸いです。

最後になりますが、本事業の実践にあたり、御指導、御協力をいただいた、関係機関の方々や各特別支援学校の皆様方に、厚くお礼申し上げます。

平成31年3月

平成30年度 徳島県「Special プロジェクト 2020」体制整備事業成果報告書（目次）

徳島県「Special プロジェクト 2020」体制整備事業

1 事業の目的・概要・・・・・・・・・・・・・・・・	2
2 活動計画（平成29年度・平成30年度）・・・・・・・・	3

I 実行委員会

1 実行委員会概要・・・・・・・・・・・・・・・・	6
2 検討状況	
第1回実行委員会・・・・・・・・・・・・・・・・	7
第2回実行委員会・・・・・・・・・・・・・・・・	8
第3回実行委員会・・・・・・・・・・・・・・・・	9

II 活動報告

1 スポーツ活動	
(1) ボッチャの伝達講習・・・・・・・・・・・・・・・・	12
(2) 各特別支援学校におけるボッチャの実践・・・・・・・・	13
(3) 徳島視覚支援学校、徳島聴覚支援学校におけるスポーツ活動の振興	17
2 芸術・文化活動	
(1) 専門家との連携とアート作品制作・・・・・・・・	18
(2) 地域におけるアート展の開催・・・・・・・・	22
(3) 四国八十八ヶ所霊場札所でのお接待活動における作品の展示と配付	24
(4) アート展の開催・・・・・・・・・・・・・・・・	26
3 活動の成果と課題・・・・・・・・・・・・・・・・	30

徳島県「Special プロジェクト 2020」 体制整備事業

1 事業の目的・概要

特別支援学校が、地域の障がい者の芸術・文化活動及びスポーツ活動の拠点となり、2020年東京オリンピック・パラリンピック競技大会を契機に開催される全国的な祭典の支援体制を整備することを目的として、本事業を推進する。そのために、外部専門家との連携によるデジタルアート等の作品制作を通して児童生徒の芸術的才能の開花を促すとともに、地域の文化遺産である四国霊場札所での作品展示を含めた「児童生徒のアート作品展」を開催し、障がい者の芸術・文化活動に対する特別支援学校の機能を強化する。また、国立特別支援教育総合研究所が実施する「特別支援学校「体育・スポーツ」実践指導者協議会」への派遣及び伝達講習を通して、特別支援学校を拠点とした障がい者の体育・スポーツ活動の充実を図る。さらに、芸術・文化及び障がい者スポーツ関係の専門家、経済団体等の委員により構成する体制整備事業実行委員会において本事業の評価と改善を行うとともに、事業終了後にも特別支援学校が地域の障がい者の芸術・文化活動及びスポーツ活動の拠点の役割を担う方策について検討を行う。

Special プロジェクト 2020

～障害の有無にかかわらず、すべての人が笑顔になる祭典～

趣旨等

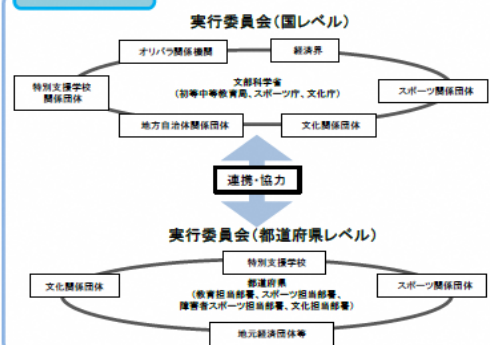
●2020年からの新たな特別支援教育(学習指導要領改訂)を契機に、**全国の特別支援学校で、スポーツ・文化・教育活動の全国的な祭典を開催**

- ・「ほんもの」のスポーツ・芸術に触れ感動を共有する機会
- ・障害の有無等を超えて誰もが心を触れ合う機会
- ・地域住民の主体的な参画

事業内容

- ①祭典の企画立案等
国レベルの中央実行委員会を開催し、事業内容を具体化するとともに、関係機関とのネットワークを構築し、ロゴマーク作成やプロモーション等を行う。
- ②各地での祭典開催のための体制整備及び情報収集
各都道府県・地域において地域実行委員会を開催し、域内の関係機関のネットワークを構築するとともに、特別支援学校で行われる運動会、文化祭に関する情報収集を行う。
- ③祭典に向けたモデル事業の実施
全国的な祭典の開催に向けた具体的な取組の先進事例を蓄積するため、モデル事業を実施する。
- ④特別支援学校等を活用した地域における障害者スポーツの拠点づくり事業の実施
特別支援学校等における体育・運動部活動等を充実するとともに、特別支援学校等を拠点とした障害者の地域スポーツクラブの設立を支援する。
- ⑤特別支援学校を対象とした全国的なスポーツ・文化大会の開催支援
全国の特別支援学校のスポーツ・文化活動の充実を図るため、特別支援学校のスポーツ・文化活動の成果を披露するための全国大会の開催を支援する。

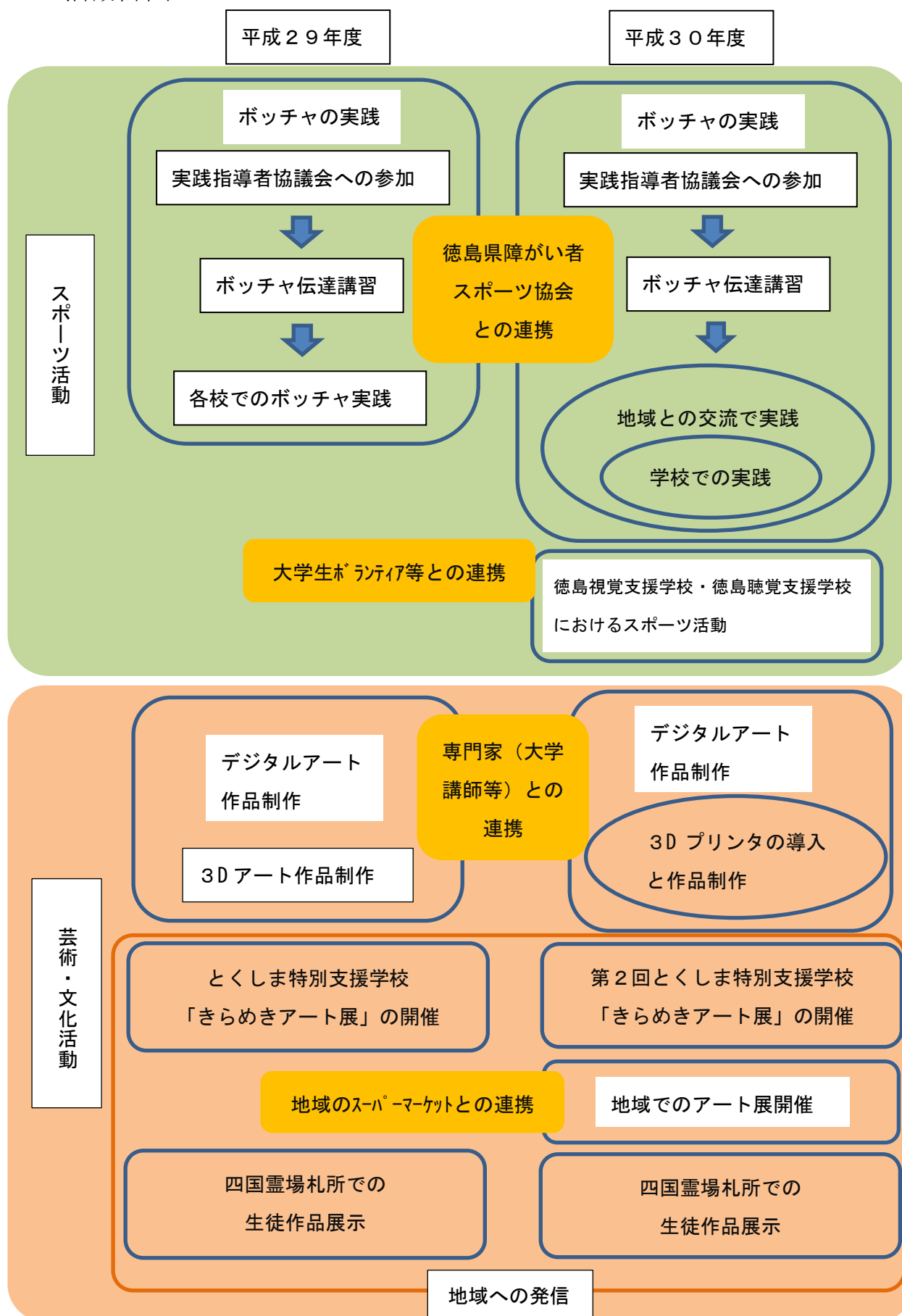
実施体制



効果

- ・地域の誰にでも開かれた次世代の「共生学校」を創造
- ・東京大会のレガシーとして、障害の有無や年齢・性別を超えた、地域の共生社会の拠点づくり

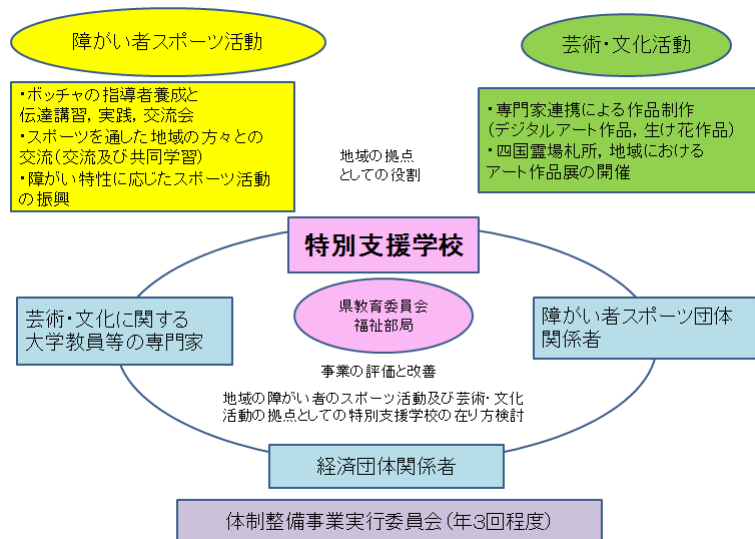
2 活動計画



I 実行委員会

1 実行委員会概要

(1) 事業実施体制



(2) 委員会の目的

スポーツ庁の委託事業「Special プロジェクト 2020」体制整備事業を実施するにあたり、徳島県「Special プロジェクト 2020」体制整備事業実行委員会を設置し、特別支援学校が地域の障害者の芸術・文化活動及びスポーツ活動の拠点の役割を担う方策について検討するとともに、本事業の評価を行う。

(3) 検討事項

- ・徳島県内のスポーツ・文化関係者（行政、学校、スポーツ団体、文化団体、経済団体、有識者等）から構成し、徳島県内の関係機関のネットワークを構築する。
- ・地域の障害者スポーツ活動及び芸術・文化活動の拠点としての特別支援学校の在り方について検討する。

(4) 委員名簿（敬称略）

区 分	所 属 ・ 職 名	氏 名	備 考
学識経験者	徳島文理大学人間生活学部児童学科准教授	富樫 敏彦	委員長
芸術専門家	四国大学生生活科学部生活科学科 デザインコース講師	上野 昇	
スポーツ	徳島県障害者スポーツ協会次長	岡本 洋明	
経済団体	株式会社キョーエイ人事部長	富田 圭司	
行政	徳島県保健福祉部障害福祉課 障害者 活躍推進担当室長	刈谷 広恵	
	徳島県教育委員会特別支援教育課 課長	榎 浩一	

2 検討状況

(第1回実行委員会)

日時 平成30年7月25日(水) 13:30~14:30

場所 徳島県職員会館 第1会議室

出席委員 6名

概要 委員長選任, 事務局による事業の概要説明

(委員からの主な意見等)



○スポーツ活動

・交流及び共同学習でボッチャに取り組むことは大切。障がいのない子どもたちが、障がい者スポーツを知るいい機会となる。

・ボッチャなら、障がいのある子もない子も楽しむことができる。広く、障がいのある人となない人が一緒に楽しめることを理解いただけると、それが契機になる。

・ボッチャは旬なスポーツ。ボッチャの大会では一般の人の参加もある。企業で車いすの方がチームを作って参加することもある。

○芸術・文化活動

・3Dプリンタを3校に導入し、作品づくりをとおして、3Dプリンタを授業のなかで使えるように取り組む予定。作品づくりはデジタルアートに絞り、コンピューターを使うような作業を行う。

・今年は3Dプリンタを学校に配置することで、単元構成をして、専門家の先生がいなくても美術の先生が作品づくりをすすめていける。昨年よりも長期的な展望で取り組める。

・教員からの支援を減らしつつ、生徒が主体でやっていけるよう、どれだけ取り組めるかが課題。

・人が立ち寄る商業施設等、学校の近くで誰もが「特別支援学校の子どもたちは、こんな作品を作っているんだな、こんな取り組みをしているんだな」と普通にみていただける環境を整えることが大事で、最終的なゴールになる。

・作品だけでなく、作っている風景なども展示してもらえるとよい。

・昨年度、障がい者アーティストの卵発掘展、アールブリュット展と同時開催できらめきアート展を開催することができた。全ての特別支援学校の芸術活動の作品があり、一方でその子どもたちが芸術家の卵として応募する機会があり、そういうなかで芸術家として育った方のアート展がある。これは時間軸となっている。みんなが広く芸術家になる、芸術に親しむ特別支援学校に。

・キョーエイさんやお遍路さんでの作品展は、人が集うところへ特別支援学校の子どもたちや作品が出て行つての作品展、きらめきアート展は、作品を用意して人に来てもらう作品展で、全くちがうかたち。人が集うところでの作品展で、関心のある人もない人も見てくれることで子どもたちの制作の意欲もわくし、見てもらうことで自信になる。一方で、自分たちで仕掛けを作って、きらめきアート展のように人に来てもらう。

・四国霊場札所でのお接待活動における作品展示を今年度も継続。

(第2回実行委員会)

日時 平成30年12月17日(月) 15:00~16:00

場所 徳島県庁 1104 会議室

出席委員 富樫委員長ほか5名

概要 事務局による事業の進捗状況説明、意見交換



なお、「徳島県障がい者芸術文化活動支援センター」が9月に新たに設立されたことを受け、当委員会にもオブザーバーとして出席いただき、関係機関の連携強化を図った。

(委員からの主な意見等)

○スポーツ活動

・現在、障がい者スポーツ協会の方で、西部、南部、中央の県内3つのブロックにおいてボッチャの大会を行っており、また全県大会も行っている。特別支援学校在学中からボッチャを経験し、卒業後はさらに大会参加等で上位をめざして取り組んでくれる選手が出てきてくれたら、と思っている。そのためにも、ボッチャの普及はまだこれからである。

・ボッチャを授業で取り組む際には、勝敗は二の次として、情緒面や知的面、身体面等の目標を立てる必要がある。取り組みはまだ緒についているところであるが、授業で取り組む際に、障がいのあるお子さんのための(負けたら怒ってしまう生徒に対する)ソーシャルスキルの訓練にもなる。作戦をたてるときの先を見通す力、友達と作戦を話し合うときのコミュニケーション力、チームワークや仲間意識など、さまざまな力の育成に関してボッチャの有効性についても、この研究において、各特別支援学校から成果としてあげてきてもらい、まとめていくと、これらの取り組みが教育に大変生かされている、子どもがのびている、という方向になると思う。

○芸術・文化活動

・店舗における展示について、スペースの問題があるが、店舗入り口を活用した展示で、入り口であると店舗を訪れたお客様が必ず通るところであり、近隣にお住まいの方がほとんどなので地域の交流になると思う。生け花展示は華やかにもなり、相乗効果が期待できる。

・聴覚障がいの生徒は、生活面で地域の方々の支援が必要であるが、作品展示によって、地域の方々からの理解も得られることが重要。

・「きらめきアート展」は、大きな会場でのアート展であり、いろいろな学校の良さがある。また、地域密着型のアート展では、地域の方が地域の中にある特別支援学校の作品を目にすることができるといことで、大変大きな意味がある。県下で一斉に集まる展覧会よりも意味があると考え。今後も、店舗におけるアート展にご尽力いただきたい。いろいろな場所での開催を期待したい。子どもたちに対する理解が得られると、子どもたちにとっても大きな助けになる。

・今年は自分の学校で3D プリントができるということで、作品づくりについても受け身から能動的、自発的に変化していることが感じられる。初めてのことで、少しずつ慣れていくところから取り組んでいるが、今後慣れていくと、作品づくりのアイデアが出てくると思う。

(第3回実行委員会)

日時 平成31年3月14日(木) 10:00～11:30

場所 徳島県庁 707 会議室

出席委員 富樫委員長ほか4名

概要 今年度取組の最終評価、今後の取組について
(委員からの主な意見等)



○スポーツ活動

- ・先生方の中に、ボッチャのルールを理解している人を増やす必要がある。
- ・ボッチャについて、小中高の間に、障がいのある人とともに交流でやってみること、その経験が大人になってから大切なのではないかと。障がい者理解のために、交流学习は大変重要である。
- ・場所の整備、施設や用具の充実を図っていくことが大切。
- ・2年目の取組で、ボッチャについて裾野の拡大を図ってきた。今後は競技力の向上が課題。
- ・学校を卒業してから、総合型地域スポーツクラブでボッチャを継続し、そこから競技力向上を図りながら、大会参加をめざす、という選手が育ってくれるとうれしい。

○芸術・文化活動

- ・キョーエイも地域密着のアート展開催に協力していきたい。スペースの問題もあるが、いろんな方に見ていただくことができるし、それが広がっていくといいと思う。
- ・「きらめきアート展」は期間が短いため、そのときだけの盛り上がりになってしまう。キョーエイさんの協力により、地域で継続的にアート展ができるとよい。
- ・アート展の同時開催により、障がい児とその子どもたちが大人になったときの施設利用者としての障がい者の作品の両方を見ることができる。
- ・スポーツとアートは障がい者理解につながるものであり、近道なのではないか。連携が大切。
- ・作品展を見に来てくれた方からは、いつどこでどのようにして作品を作ったのか、という疑問も寄せられており、それに答えられるような情報提供が必要。特別支援学校のことを知っていたくために、アートやスポーツは大きな手段になると考える。
- ・作品と一緒に、制作風景の写真や、子どもたちからのメッセージ等を展示できるとよい。
- ・特別支援学校の文化祭では子どもたちの作品を展示しており、地域に公開しているものの、やはりまだ敷居が高い。スーパーでの展示であれば、敷居がなく、そこに行けば自然に特別支援学校の作品が見られるということになる。
- ・特別支援教育を受けている子どもたちは、児童生徒の人口において約10%。障がいのある子どもの両親や祖父母等の家族や親類を含めると、関係者は結構な数の方々になる。アート展のような啓発の機会があると、勇気づけられたり、重ねて見ていたりしている。案外、他人事ではない。今後も地域でのアート展をとおして、芸術によって人々を勇気づけてほしい。

Ⅱ 活動報告

1 スポーツ活動

(1) ボッチャの伝達講習

- 1 ねらい 特別支援学校でのスポーツ活動の充実をめざし、ボッチャの普及・促進を図る。
- 2 日 時 平成 30 年 10 月 26 日（金）午後 1 時から午後 4 時まで
- 3 場 所 徳島県立板野支援学校 体育館
- 4 参加者 8 名（特別支援学校教員）
- 5 内 容

伝達講習 1（開催校の生徒とボッチャ実践）

研修参加の教員にボッチャに親しんでもらうため、開催校の生徒、教員と一緒に 6 グループを構成して簡単な練習から始めた。的をねらってボールを投げる練習では、赤チームと青チームで競い合い、少しずつ的を遠くすることで、楽しみながら取り組み、笑顔や歓声があった。

伝達講習 2（研修報告）

国立特別支援教育総合研究所「特別支援学校「体育・スポーツ」実践指導者協議会」に参加した教員から、障がい者スポーツの現状や障がい者スポーツの振興に係る取り組みについて報告があった。また、各学校でのボッチャの実践について意見交換を行い、手作りで道具を作成したり、障がい特性に応じて工夫を凝らしたりしていることなどを話し合った。



伝達講習 3（ボッチャの実践）

徳島県障がい者スポーツ協会の指導者からボッチャのルールの説明を受け、参加者全員でボッチャを実践した。赤チームと青チームに分かれて何度もゲームを行うことで、ルールを理解し、作戦を考えながらボールを投げたりゲームを楽しんだりすることができた。

また、開催校の教員も多数参加し、繰り返しゲームをするなかで、参加教員は戦術を考えたり、審判を体験したりして、ボッチャへの関心を高めた。



赤・青チームに分かれてゲーム



得点の数え方練習



教員も審判を体験

参加者アンケートでは、「もっとたくさんボッチャを実践したい」など積極的な意見が見られた。伝達講習を契機に、各特別支援学校でのさらなるボッチャの実践や、交流及び共同学習におけるボッチャ実践のきっかけづくりにつなげた。

（２）特別支援学校におけるボッチャの実践

１ ねらい ボッチャの普及を図り，県下の全ての特別支援学校で実施する。

２ 実践内容

① 学校での実践

（視覚障がい，聴覚障がいの学校における実践）

徳島視覚支援学校（10月実施，対象：視覚舎生5名，聴覚舎生4名）

寄宿舎の合同スポーツ大会でボッチャを実施した。視覚聴覚混合でチーム編成したが，ゲーム中は聴覚舎生が目標球の位置を視覚舎生に言葉で伝えるなど，競技中のサポートする姿が見られた。また，ルールを両校の障がいの実態にあうように少し変更し，一緒に楽しみやすいようにした。



徳島聴覚支援学校（11月実施，対象：中学部生徒10名）

ルール説明，練習，試合という流れで実施した。教員が加わり，4チームのトーナメント戦で行った。昨年度は勝敗がわかりやすいようにジャックボールに一番近いチームが1対0で勝ちとしたが，競技ルールを知っている生徒も多いことから今回は通常ルールでの得点方法を採用した。第3エンドで逆転勝ちするチームもあり盛り上がった。

（肢体不自由の学校における実践）

板野支援学校（10月実施，対象：知的障がい，病弱の中学部生徒12名）

7回の授業で実施。動画を使ってルールを説明し，目標となるフープの中へボールを入れる，ジャックボールに近づく，ジャックボールや青赤ボールを動かすなどの作戦を伝えて実践練習，チームメイトと相談して投げるなどの課題を付け加えて実践練習と段階的に取り組み，7回目には初任者研修で来校している小中学校の教員と一緒にゲーム大会を行った。



鴨島支援学校（4月～12月実施，対象：中・高等部生徒2名）

体育の授業で，簡素化したルールにより，教員と生徒が組み，戦略を相談しながらゲームを進めるペア戦で実施。手作りのスロープを準備し，自力での投球が難しい生徒は，スロープを使用する。スロープの傾斜角度や方向は，生徒が教員に伝え，教員がその指示通りに調整している。



ひのみね支援学校（10月に体育祭で実施，対象：高等部）

体育祭の高等部学部種目で，2チームに分かれてボッチャの対抗戦を行った。

(知的障がいの学校における実践)

国府支援学校 (12月実施, 対象: 中学部生徒 27名)

準備体操の後, ボールの持ち方・投げ方・今日のルール説明を行い, 目標フープ・ケンステップを活用してボッチャを実践した。

阿南支援学校 (12月実施, 対象: 高等部生徒 8名)

放課後活動で, 教員と生徒が一緒にチームとなりゲームを実施。ゲームでは, 相手チームより得点をリードしていても, 逆転する場面があるなど, 最後まで勝敗が分からない所などがあり, 生徒も教員も熱中して取り組んだ。生徒からは「もう一回したい」「体育でしたい」などの声が聞かれた。



阿南支援学校ひわさ分校 (11月実施, 対象: 中学部・高等部生徒 5名)

総合的な学習の時間で実施。1回目の授業で, 持ち方・投げ方の練習, 的を使ってゲーム, 近い距離から徐々に的を離していく, の順に実践。2回目の授業では, 持ち方・投げ方の確認, ルール等の説明や, 練習しながらのルール確認, 作戦の立て方のアドバイス, ゲームと段階的に実践した。生徒の実態に応じて活動することができ, ルールの理解度に差があるが, 的の近くにボールが行ったときに, 喜ぶなど集団での活動に取り組むことができた。



池田支援学校 (4月から実施, 対象: 高等部生徒 18名)

総合的な学習の時間に実施。タブレットを用いてルールや道具について調べ学習を行い, 近隣の障がい者支援施設よりボッチャの道具を借りて, ゲームをしながらルールを覚えたり, 模倣して道具を作ったりした。(この道具は, 学校祭のゲームコーナーでも活用した。)



池田支援学校美馬分校 (9月～11月実施, 対象: 高等部生徒 16名)

10月の交流会に向けて9月より練習を開始。まずYouTubeの動画等を使ってルールや試合の流れを確認し, 持ち玉をジャックボールに近づける練習の後, ミニゲームなどを行った。道具は障がい者スポーツ協会から5回程度借用した。



(知的障がい，病弱の学校における実践)

みなと高等学園 (12月実施，対象：高等部生徒22名)

投げ方・ルールなどボッチャの説明の後，練習，試合の順に実施。互いに応援したりうまく投げるコツを伝え合ったりして，楽しむ姿が見られた。

② 交流及び共同学習における実践

国府支援学校 (12月実施，高校との生徒会の交流)

本校生徒会役員による授業交流でボッチャを実施。簡単なルール説明の後，混合8チームに分かれてリーグ戦を行った。ゲームをとおして，チームごとに作戦を考え，互いに意見を出したりアドバイスをしたりと，自分たちでコミュニケーションを図りながらゲームを進めていくことができ，初対面の生徒たちに笑顔が見られた。互いに心のバリアフリーを考える時間を過ごせた。



ひのみね支援学校 (12月実施，高校3校との交流)

4校の生徒がバラバラになってチームを結成し，交流ボッチャ大会を開催。その後，学校選抜チームを結成して学校対抗戦を行った。一緒にプレーする中で一体感が生まれ，積極的に活発な交流となった。



池田支援学校 (12月に2回実施，障がい者支援施設との交流)

近隣の障がい者支援施設を訪問し，生徒3人対利用者3人で交流試合を実施。1エンドごとにメンバーを替えながら対戦した。本格的なコートでボッチャを体験することができ，地域の方との対戦により，ゲーム感が高まり，普段とは違った楽しさを味わった。

池田支援学校美馬分校 (10月実施，地域のロータリークラブとの交流)

地域のロータリークラブより道具の寄贈があり，贈呈式の後，授業で練習した成果を発揮して，生徒とロータリークラブ会員でチームを組んで交流戦を行った。和気あいあいと楽しみ，交流を深めた。



3 成果と課題

(成果)

<授業>

- ・運動能力が違う生徒とのゲームでもルール等を工夫することで競い合うことができた。
- ・軽度の生徒を中心とした学級で行ったので、作戦を考える時間を作ったり、ゲーム中に生徒同士がアドバイスしあったりするなど、より実践的な活動を行うことができた。

<交流>

- ・障がいのない生徒にとって、障がい者スポーツについて、知るための良い機会となった。
- ・誰もがすぐに行える競技で、自然とチーム内での会話が始まり、生徒たちの心もほぐれる。
- ・一緒にプレーする中で一体感が生まれ、積極的で活発な交流となった。
- ・視覚障がいのため、ボールが見えにくくても、ボールの位置がわかるようにサポートすることでボッチャを楽しむことができた。

(課題)

- ・今後、普及を図るためには、さらにボッチャのルールを理解している教員を増やす必要がある。
- ・大会のビデオなどを見せて、種目としてのボッチャの全体像を理解する必要がある。
- ・床の質によって転がり方が違うため、正式なルールやコートの床質も意識した授業を実践する必要がある。

(今後のボッチャの活用場面)

- ・障がいの程度に関係なく一緒にプレーできるので、学部間の交流、参観日での親子交流や、他校の生徒との交流学习時に実施することができる。
- ・ボッチャは、ルールもわかりやすい、コートの広さも比較的準備しやすいことから、地域の高齢者施設や小学校、中学校、高校との交流には大変取り組みやすい。

(考察)

昨年度からの取組により、全校においてボッチャを実践するとともに、ボッチャをとおして地域との交流を深めることができるようになってきている。生涯親しめるスポーツとして、今後もボッチャをとおした地域との交流を継続するとともに、特別支援学校間においても交流会を計画する等、さらなる広がりを検討していく必要がある。また、児童生徒の特性やニーズに応じて、親しみやすい活動として、ニュースポーツの導入等、活動の展開を考えたい。

(3) 徳島視覚支援学校、徳島聴覚支援学校におけるスポーツ活動の振興

1 ねらい 大学生ボランティア等の活用により、スポーツ活動の振興を図る。

2 実践内容

徳島視覚支援学校（1月実施、対象：寄宿舎生5名）

外部講師を招いてストレッチ教室を実施。身体の構造や動きについての説明のあと、ストレッチを行った。視覚に障がいのある寄宿舎生に丁寧な言葉による指導と手を携えての指導をすることで、普段身体の動かさない部分を伸ばしたりほぐしたりすることができた。



(成果)

日頃、運動する機会の少ない寄宿舎生にとって、専門家によるストレッチ教室は、初めての試みで、講師の指導に従い身体をほぐしていくことができた。今回、ストレッチの基本動作等を学び、自分一人で行うときにもストレッチを行うことで、健康維持に繋げることが期待される。生徒からも「自分の身体の硬い部分が柔らかくなるように少しずつ改善できたらいいなと思った」と前向きな意見があった。



(課題)

今回、学んだことに継続して取り組み、日頃のスポーツ活動につなげることが課題である。

徳島聴覚支援学校（各学期に1回実施、対象：卓球部員（中学部6人、高等部2人））

近隣の大学卓球部との連携により、本校卓球部生徒への技術指導を受けた。1回あたりの練習時間は1時間で、1回あたりの大学生の参加は、1人から4人であった。



(成果)

卓球競技について、現役の選手から指導を受けることで、新しいプレイの流れや、それに伴う技術習得の方法を指導してもらうことができた。高等部生徒にとっては、卒業後のレクリエーションの持ち方や意義などを大学生の姿から学ぶことができた。生徒からは「打ち方のポイントをわかりやすく教えてくれた」、「チキータの打ち方を、初めて知ることができた」等の声が聞かれ、卓球をとoshした交流を図るとともに、大学生より技術面で詳しい指導を受けたことが嬉しかったようである。



(課題)

大学生は講義等で多忙なため、日程調整等、連携の機会確保に難しさがあったが、卓球は「障がいの有無に関わらず交流できる種目」であり、今後も生徒の技能向上を支えるという目的で、部活動の指導を中心に地域との連携を考えたい。

2 芸術・文化活動

(1) 専門家との連携とアート作品制作

- 1 ねらい 外部専門家との連携によるデジタルアート等の作品制作を通して児童生徒の芸術的才能の開花を促す。
- 2 実施校 徳島聴覚支援学校、板野支援学校、ひのみね支援学校、鴨島支援学校、みなと高等学園、
- 3 講師 (徳島聴覚支援学校、板野支援学校、鴨島支援学校、ひのみね支援学校)
四国大学 生活科学部
生活科学科 デザインコース 講師 上野 昇 氏
(みなと高等学園)
徳島文理大学 人間生活学部
建築デザイン学科 教授 川村 恭平 氏
メディアデザイン学科 教授 篠原 靖典 氏
- 4 期 間 平成 30 年 9 月から平成 31 年 2 月まで
- 5 場 所 各特別支援学校及び四国大学、徳島文理大学
- 6 活動内容

徳島聴覚支援学校（2月に4回実施、場所：徳島聴覚支援学校、対象：高等部生徒3名）

「お盆の上の自然と3D オブジェ」

自然な物（石、土、苔、枯れ葉など）と3D ハンディプリンタで作った物を組み合わせて、自分の想う世界を制作した。家から持ち寄った自然物と3D ハンディプリンタでオブジェを作り、生徒は、自身の世界観で山や海を意欲的に表現することができた。3D ハンディプリンタで作る人工的なオブジェの特性を生かし、創造的な構成を考え、作品制作を行うことができた。



板野支援学校（2月に2回実施、場所：板野支援学校、対象：高等部生徒5名）

「3D プリンタでメダルキーホルダーを作ろう」

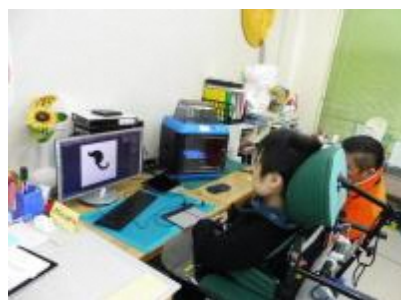
アプリ (ibis Paint X) を使用したデータ作成, 3D プリンタ出力用のデータ作成, 3D プリンタの操作, 出力した作品の仕上げに取り組んだ。



鴨島支援学校

(12月～1月に3回実施，場所：四国大学，鴨島支援学校，
対象：中学部高等部生徒4名)

1回目は四国大学訪問，2回目は学校，3回目は四国大学訪問で授業を行った。3Dプリンタの使用方法について学ぶとともに，生徒がデザインした画像を3Dプリンタで出力し，レリーフ作品等を制作した。大学訪問では，作品制作の他にキャンパス内の見学も行うことができた。



ひのみね支援学校

(11月～1月に実施，場所：ひのみね支援学校，対象：小学部中学部高等部の児童生徒)

- ・小学部2・3組(6名)

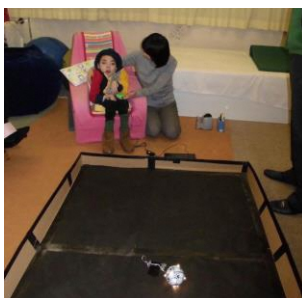
「児童のミニチュアキーホルダー」

それぞれ約2分間ポーズを決めて，静止したポーズで3Dスキャンし，キーホルダーを作成した。



- ・小学部4・5組(5名)

スヌーズレンルームで部屋を真っ暗にして，LEDのライトをつけたボールとスイッチをMaBeeでつなげ，児童がスイッチを押してボールを動かした。その軌跡をシャッターを開けたままのカメラで撮影し，作品にした。軌跡をパソコンに映し出し，出来上がった作品を鑑賞した。



- ・小学部6・7組(4名)

3Dプリンタを活用し，児童それぞれの表情を表した作品等の制作に取り組んだ。今後，できあがった型を使い，クッキー作りをする予定である。



・ 中学部 1 組（2 名）

「ネームプレート作成」

好きなキャラクター画像を、インターネット上の「切り絵変換サイト」を活用して切り絵風に変換した後、画像と名前を組み合わせでデザインした。完成したデザインを 3D プリンタで出力し、キーホルダーをつけてネームプレートを完成させた。

「生徒のミニチュアキーホルダー」

2 分間静止した状態で 3D スキャンし、3D プリンタで出力してキーホルダーをつけた。

・ 中学部 2 組（6 名）

「ランプシェード作成」

①各自 3 枚ずつ思い出や好きな写真を選び、PC ソフトを使って白黒の陰影がついた図案にする。

②図案を 3D プリンタで 3D 写真パネルとして出力。

③三角柱のランプシェードになるよう、上下三角の型枠も 3D プリンタで出力。

④内側に透明瓶を入れて、3 枚の 3D 写真パネルと型枠を組み立て、底に LED ライトのコースターを置き完成。

「立体フィギュア作成」

1 人、または教員と一緒に活動している状態を 2 分間、iPad の専用アプリで撮影し、撮影した 3D 画像を 3D プリンタで立体フィギュアとして出力し完成。



・ 中学部 2 年 1 組（2 名）

「ネームプレート作成」

①好きな画像を選び、インターネット上の「切り絵変換サイト」を活用して切り絵風に変換した。

②画像と名前を組み合わせでデザインした。

③完成したデザインを 3D プリンタで出力した。

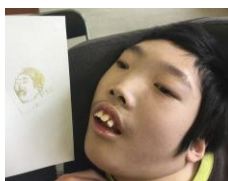
④キーホルダーやヒモをつけてネームプレートの完成。



・ 高等部 1 年（5 名）

「生徒のスタンプ作成」

3D プリンタで生徒の顔写真を元にしたスタンプの制作を行った。事前に 3D プリンタで出力された顔写真を、表面を紙やすりで生徒と一緒に削り、インクが均一にのるように加工した。好きな色のスタンプのインク台を選択し、インクをつけて紙に試し押しをした。スタンプをタックシールに押し、自分のラベルを作り、名前シールとして活用することができた。

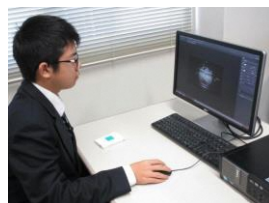


みなと高等学園（10月、12月実施、対象：高等部1年生8名）

徳島文理大学人間生活学部との連携により、ドローンによるみなと高等学園校舎の俯瞰写真・動画の撮影、そして撮影画像を使ったデジタルアート作品の制作を行った。

10月に川村教授の指導のもと、大学生からの協力を得て、みなと高等学園グラウンドにてドローン操作を練習、その後学園校舎の撮影等を行った。

12月に篠原教授の指導により、徳島文理大学のCAD室にてドローンで撮影した画像を使ってデジタルアート作品を制作した。作品完成後、大学の特撮スタジオを見学した。



7 成果と課題

（成果）

<3Dプリンタの活用による制作>

- ・写真が、3Dプリンタで白黒の陰影がついた趣のある3D写真パネルになり、それぞれの思い出がグッと心に響く作品が完成し、保護者にも喜んで頂けた。
- ・自分の好きなデザインや自分の姿をモチーフにでき、興味を持って取り組むことができた。
- ・自分で考えたデザインが3Dプリンタで立体的になったことで新たな発見や喜びを感じることができた。
- ・3Dプリンタを使用した作品制作を行うことで、パソコンで描画することや、従来通りの描画からスキャンし、加工する技法を学習することができた。
- ・専門家との連携により、教員の専門外の分野で生徒に学びの場を提供でき、有意義であった。

<ドローンの活用による作品制作>

- ・ドローンの操作や撮影に興味を持って意欲的に取り組むことができた。
- ・今回のデジタルアート制作を通して、画像処理や撮影に対する生徒の経験を広げ、興味を深めることができた。

（児童生徒の意見）

<3Dプリンタの活用による制作>

- ・楽しかったです。また今度やってみたいです。作ったネームプレートはカバンにつけたいです。
- ・すごくリアルできれいにできました。3Dプリンタのことをしっかり聞きたい。
- ・作るのがちょっと難しかったけど楽しかった。
- ・iPadを使ったデザインでは苦戦を強いられたが、最終的に自分らしい作品ができてよかった。

・デザインでとても悩んだが時間内に完成してよかった。まだやり方は覚えられていないが、またやってみたい。

・紙のようなものから立体的なプラスチックのものができて驚いた。

・自分のイメージした自然と組み合わせて3Dプリンタで世界を作り出せる所に面白みを感じた。

＜ドローンの活用による作品制作＞

・希望していたドローンの操縦や撮影ができて本当に良かった。貴重な体験ができた。

・ずっと運動場でドローンを操縦していたかったです。

・画像処理の方法を分かり易く丁寧に教えていただいた。写真を加工するのは大変楽しい。

（課題）

・さらにどのようなデジタルアート作品を作ることができるか等の情報を得る必要がある。

・どんな作品を作りたいか？ということはなかなか児童生徒から聞き出したり、読み取ったりすることは難しい場合があるため、動きの少ない児童であっても、主体的な動きを活用して作品作りができるような内容を検討する必要がある。

（考察）

これまでの取組において、児童生徒からは、自分のデザインによる作品を制作できた喜び、新たな手法へのチャレンジによる驚きや面白さ等の声が聞かれ、制作過程そのものを楽しむとともに、作品の完成により達成感を味わうことができたことが成果である。

今後の作品制作について、教員からは、3Dプリンタの活用方法や作品例をもっと知りたい、との声がある。絵画や立体作品等の従来からの手法に加えて、生徒の希望や豊かな発想を具体化できる作品制作に向け、今後もデジタルアート等の専門家と連携を図り、幅広い制作活動を展開していく必要がある。

（２） 地域におけるアート展の開催

１ ねらい 地域での作品展示をととして、地域に向けた発信について検討を行う。

２ 実践内容

徳島聴覚支援学校

（日時）

・第１回：平成30年12月13日～12月21日

・第２回：平成31年1月17日～1月25日

・第３回：平成31年2月20日～3月1日

（展示場所）

キョーエイ二軒屋店 店舗入り口

（成果）

・参加生徒全員が、将来デザインや理容等、造形活動に関わる進路を考えているため、自分の



作品を評価してもらえる機会として、3回の作品展を開催できたことが励みになった。

・店舗利用のお客様には「こんな作品展があるなら、次からこの店に来る楽しみができた。」と喜んでもらえるとともに、地域への理解啓発の機会となった。

池田支援学校

(期間)

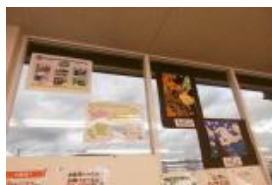
平成31年2月後半から3月末まで

(展示場所)

近隣の商業施設（サンシャイン池田・ダイソー三加茂店）

(成果)

学校紹介およびセンター的機能の広報をかね、チラシの展示と本校児童生徒の絵画作品や書写作品の展示を行った。児童生徒からは「たくさんの人に見てもらいたい」「みんなが見てくれてうれしい」との声が聞かれた。



みなと高等学園

(日時)

平成31年2月12日～2月18日

(展示場所)

キョーエイ小松島店 1F 入口

(成果)

・学校の近くのスーパーで、買い物学習や現場実習・調理実習・宿泊学習の買い出しなど、日頃から生徒がよく利用しているスーパーだったので、地元の人たちから作品を見たという反応が多くあった。

・作品の搬入を生徒自身が行うことによって、アート展の開催に向けた作業を体験できた。

(考察)

近隣の商業施設でのアート展開催は、作品発表の機会として児童生徒の意欲を高めるとともに、作品をとおして地域への理解啓発を図ることができる取組である。今後も、取組の継続や他校での実施等の拡大を図り、地域に密着した形で児童生徒のアート作品を身近に見られる機会を日常にしていくことが大切である。

学校からは、今後、作品を制作中の児童生徒写真を作品に添付することで、より理解啓発につながられるのではないかと提案もあり、特別支援学校の取組を発信する機会として、展示の期間・方法・児童生徒の参画等、さらに創意工夫を加えることができ、多くの可能性がある取組といえる。



(3) 四国八十八ヶ所霊場札所でのお接待活動における作品の展示と配布

1 目的

特別支援学校の児童生徒が持つ技能や豊かな感性を生かした作品等を四国八十八ヶ所霊場札所でのお接待活動において展示したり，お遍路さんに配布したりすることをとおして，各特別支援学校の特色ある取組の推進や児童生徒の豊かな表現力の向上を図るとともに，文化・芸術分野における障がい者の才能に対する理解と活躍の機会拡充を推進する。

2 実施内容

四国八十八ヶ所霊場札所が近くにある特別支援学校4校で，次のとおり実施した。

学校名	活動場所	実施日	参加生徒数
板野支援学校	第三番札所 「金泉寺」	平成 30 年 7 月 17 日 (火) 10:00～11:45	高等部 7 名
		平成 30 年 9 月 18 日 (火) 10:00～11:45	高等部 6 名
		平成 30 年 11 月 27 日 (火) 10:00～11:45	高等部 7 名
		平成 30 年 12 月 11 日 (火) 10:00～11:45	高等部 7 名
		平成 31 年 2 月 26 日 (火) 10:00～11:45	高等部 8 名
国府支援学校	第十四番札所 「常楽寺」	平成 30 年 10 月 25 日 (木) 10:00～11:30	高等部 7 名
		平成 30 年 10 月 26 日 (金) 10:00～11:30	高等部 7 名
池田支援学校 美馬分校	第八番札所 「熊谷寺」	平成 30 年 11 月 1 日 (木) 10:00～12:00	高等部 11 名
阿南支援学校 ひわさ分校	第二十三番札所 「薬王寺」	平成 30 年 10 月 17 日 (水) 10:00～11:10	小学部 1 名
		平成 30 年 10 月 19 日 (金) 10:00～11:10	中学部 2 名
		平成 30 年 11 月 27 日 (火) 10:00～11:10	高等部 11 名

板野支援学校

牛乳パックをリサイクルした「しおり」や「はがき」，生徒が描いたイラストをアイロンプリントした「手拭い」，縫製の技能を生かした「香り袋」を毎回展示し，同様のものをお遍路さんへ配布した。

お接待活動を6回実施し，計236名に作品を配布した。



国府支援学校

牛乳パックをリサイクルし、生徒がデザインして仕上げた「しおり」や「はがき」をお遍路さんへ配布した。また、生徒が授業や作業等で作成した作品を展示し、参拝後のお遍路さんに鑑賞していただいた。



お接待活動を3回実施し、計47名に作品を配布した。

池田支援学校美馬分校

生徒が縫製の技能を生かして製作した「アームカバー」を展示するとともに、生徒たちが製作の様子を説明し、お遍路さんに配布した。

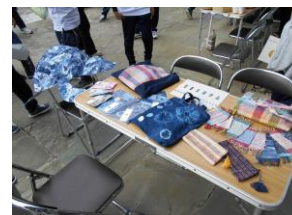


お接待活動を2回実施し、計85名に作品を配布した。

阿南支援学校ひわさ分校

生徒が藍染めをした「ハンカチ」やご当地自慢のウミガメをモチーフにした「ストラップ」を製作し、お遍路さんに配布した。

また、日頃の授業等で作成した作品を展示し、お遍路さんに鑑賞していただいた。



お接待活動を3回実施し、計74名に作品を配布した。

3 成果と課題

取組成果としては、前年度より実施校が1校拡大し、より多数のお遍路さんに対して作品を配布したり、回数多く作品を展示したりすることができた。作品の配布では、受け取ってくださったお遍路さんから「素敵ですね、いい記念になります。」「上手にできていますね、大事にします。」などの児童生徒の表現力や感性あふれる作品に対する好評価を得るとともに、特別支援学校の取組を県内外へと広く発信することができた。

また、作品の展示では、お遍路さんが立ち止まって作品を見てくださったり、作品の作り方や製作に係った時間などを質問してくださったりするなど、生徒の作品に関心を持っていただく機会につながったと考える。

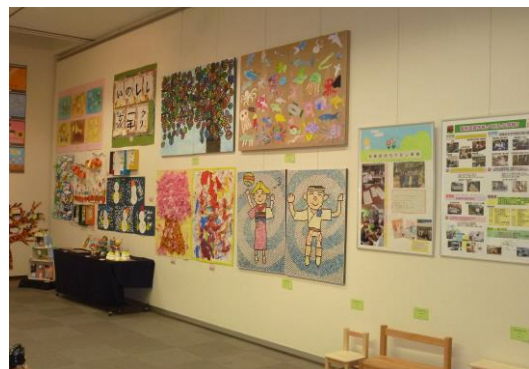
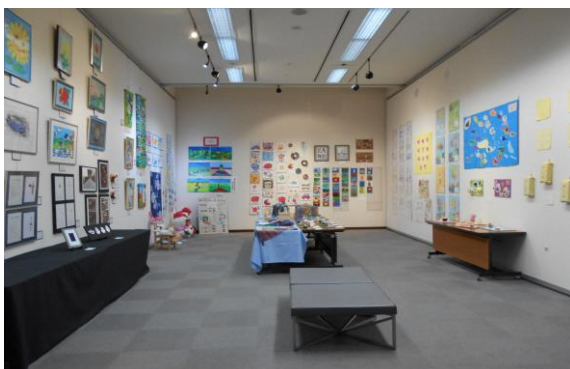
一方、今後の更なる取組の拡充にあたり、お接待活動を実施する特別支援学校の拡大及び学校間の連携による札所が近くにない特別支援学校の生徒が作成した作品の展示や配布が課題として挙げられる。

(4) アート展の開催

- 1 ねらい 県内の特別支援学校の幼児児童生徒のアート作品によるアート展を開催し、来場者に対して、それぞれの特別支援学校での取り組みを発信し、各学校の特色ある取り組みを紹介する場とする。併せて、Special プロジェクト 2020 体制整備事業で取り組んだエシカル作品やボッチャの活動について紹介する。
- 2 名 称 第2回とくしま特別支援学校「きらめきアート展」
- 3 参加校 県内の特別支援学校及び分校 12 校（鳴門教育大学附属特別支援学校を含む）
- 4 日 程 平成 31 年 2 月 27 日(水)～3 月 3 日(日)
- 5 会 場 徳島県立二十一世紀館 1 階
多目的活動室
- 6 展示内容 共同作品、個人作品あわせて 705 点
(絵画、立体、手工芸、書道、エコ作品、デジタルアート、陶芸、木工作品、学校紹介パネル等)
- 7 入場者 1,143 名
- 8 同時開催 アール・ブリュット再考 2 展,
「障がい者アーティストの卵」発掘展
(ともに徳島県障がい者芸術・文化活動支援センター主催)



9 内 容 (アート展の様子)





デジタルアート作品



エシカル作品（今年度は会場にコーナーを設けて展示）



10 来場者アンケート

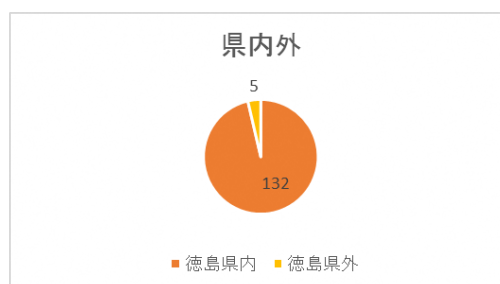
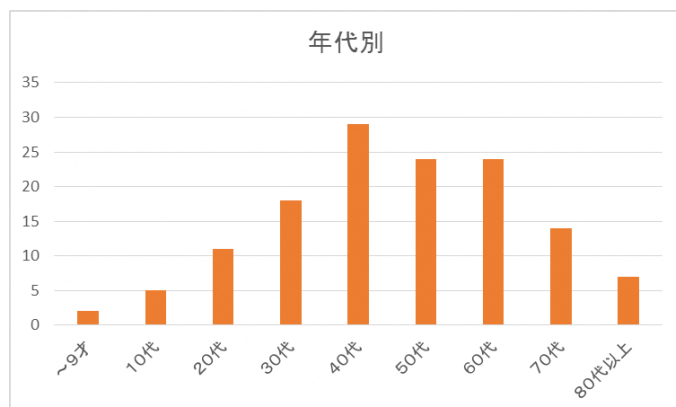
【調査概要】

期間：平成31年2月27日（水）から3月3日（日）まで

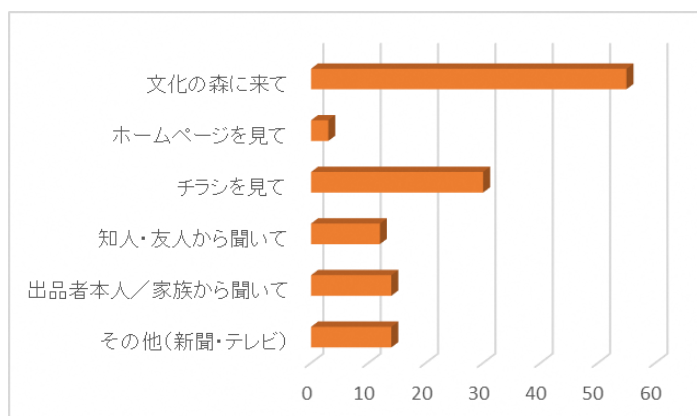
場所：県立21世紀館 多目的活動室（アート展会場内）

回答者数：137名

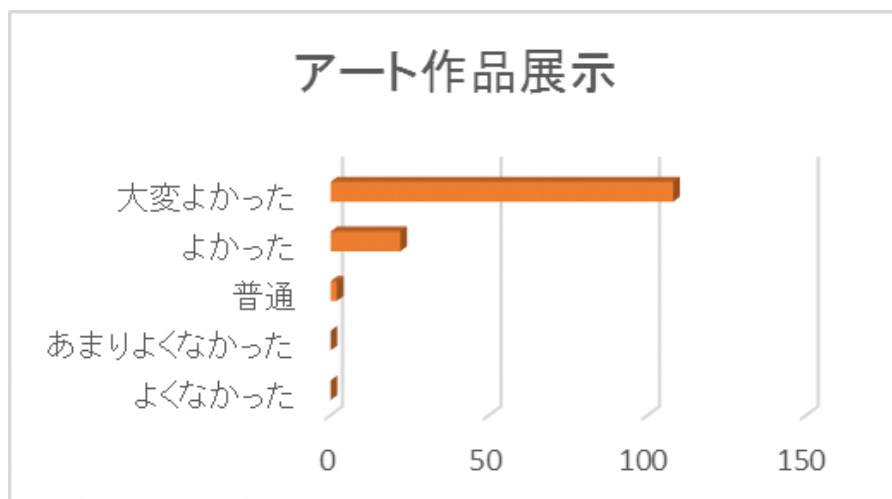
○回答者の属性

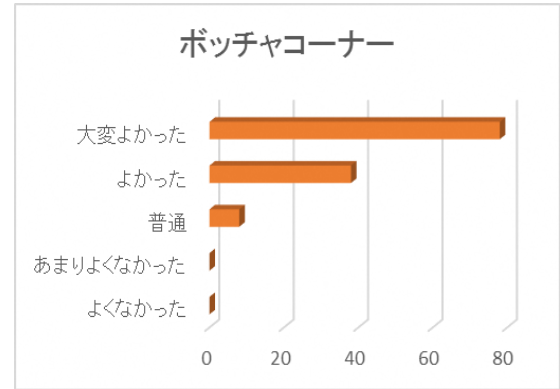
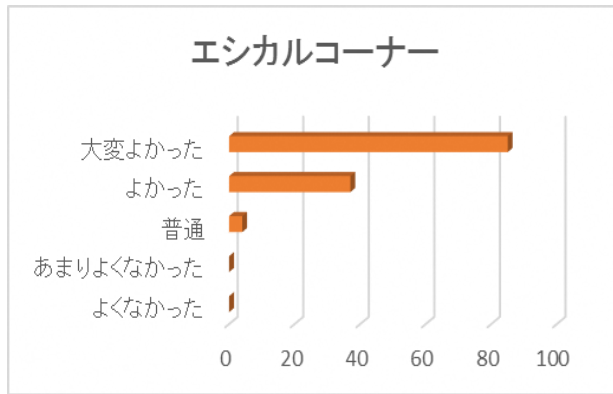


○アート展の情報入手方法



○「きらめきアート展」の感想





1 1 来場者からの意見等

(改善点を含む 意見等)

- ・今回の展覧会で、特別支援学校について初めて知ったことが多くあった。積極的にアピールする場を多くすればよいと思う。
- ・作品の説明をつけてあったのはわかりやすかった。
- ・こういった方法で作成しているのか、知りたかったものがある。
- ・文化の森は多くの人が訪れる場所なので、作品展の開催に適している。
- ・開催時期、期間について、もう少し長かったらよい。

(感想等)

- ・アイデアの宝庫のような展覧会で、それぞれの個性が輝いていました。
- ・保育士です。表現方法を試しておられ、自分も子どもと楽しみたいと思った。
- ・どの学校の作品もすばらしかったです。またこれからもずっと続けてください。
- ・発表の機会が多くなるとよいですね。

1 2 成果と課題

(成果)

昨年に続き、県内全ての特別支援学校が参加し、705点の特色あふれる作品により、アート展を開催することができた。特別支援学校6校より見学があり、徳島県障がい者芸術・文化活動支援センター主催のアート展との同時開催により、多くの来場者があった。広く県民の方々にも特別支援学校の取り組みを知っていただくよい機会となった。

(課題)

作品とともに、作成風景の様子や児童生徒のメッセージ等を一緒に展示する等、特別支援学校の取組を発信する方法について、さらに工夫を加える必要がある。また、HPでのアート展作品を紹介する等の取組を拡充し、Webを活用した作品紹介の方策をさらに検討していきたい。

3 活動の成果と課題

本県の特別支援学校におけるスポーツ活動と芸術・文化活動の振興を図るため、本事業を実施した。

スポーツ活動では、国立特別支援教育総合研究所「特別支援学校「体育・スポーツ」実践指導者協議会」による指導者の養成及び徳島県障がい者スポーツ協会の協力のもと、県内の特別支援学校全校でボッチャを実践するとともに、地域の学校との交流及び共同学習の場にボッチャを取り入れ、スポーツを通じた交流の推進に取り組んだ。一部の特別支援学校では、部活動に近隣の大学生に指導に加わっていただいたり、講師招へいによる活動を実施したりして、スポーツ活動の充実や地域との連携へと広がりを見せてきたところである。

芸術・文化活動においては、専門家の指導により、児童生徒の豊かな発想によるデザインを3Dプリンタで出力して作品を制作するなど、デジタルアートの視点を取り入れて表現の幅をひろげるとともに、県内全ての特別支援学校が一堂に会した「きらめきアート展」の開催や、四国霊場札所での作品披露等により、児童生徒の新たな才能開花を目指すとともに、県民等への理解啓発を行ってきた。また、学校近隣のスーパーマーケットのスペースを活用し、作品や生け花の展示を行い、地域住民へ、特別支援学校における芸術・文化活動の取組の周知啓発を行ってきた。作品をとおした発信により、賞賛や今後の継続、発表の機会拡大を期待する声が聞かれている。

課題としては、スポーツ活動振興のため、今後、これまで取り組んできた成果を活かしつつ、特別支援学校間でのボッチャ交流会の開催や、ボッチャのみならず、屋外で行うニュースポーツも含めた交流・共同学習へと広げていく必要がある。

芸術・文化活動においては、新しい作品制作に取り組み、全校で、また各校が地域に密着してアート展を開催するとともに、リサイクル素材等のエシカル素材を用いた作品を地域の児童生徒と共同制作するなど、障がいのある児童生徒から、人や社会・環境に配慮した「エシカル消費」について積極的に発信することに加え、地域との共同作業を通して、持続可能な社会づくりについての理解啓発につなげることが重要である。

特別支援学校が、地域とともにスポーツと芸術・文化の活動を進められるよう、今後も各方面との連携を深め、障がい理解の啓発や、心のバリアフリーの推進に取り組んでまいりたい。

平成30年度 スポーツ庁委託事業
「Special プロジェクト 2020 体制整備事業」

徳島県「Special プロジェクト 2020」体制整備事業
平成31年3月29日発行

徳島県教育委員会特別支援教育課

